

資料・研究ノート

マラッカのチャイニーズ・カピタンの系譜—補遺二則

日 比 野 丈 夫*

Two Supplements
to a Chronology the Chinese Kapitans of Malacca

by

Takeo HIBINO

1969年本誌第6巻第4号に上記表題の論文を発表してのち、新しい資料が手に入ったので補遺を加える必要を生じた。それは青雲亭にある碑文の一部やカピタンの神主のいくつかを筆録した小冊子であるが、われわれは寓目の機会を得なかったものである。シンガポールの陳育崧氏が青雲亭から借用せられたのを、香港の中文大学新亜書院の陳荊和教授が写して送って下さったのであって、この一文を草しえたのは、両氏の御厚意のたまものにほかならない。深く感謝の意を表す。新資料というのは、この冊子に記された二人のカピタンの神主で、残念ながら先年の調査のさいには管見に上らなかった。この冊子がいつ作られたものか明らかでないが、神主そのものはわれわれが見ることができなかつただけで、今日もなお青雲亭のどこかに存在していることと思う。

I

その第一が前の論文で6番目にあげた陳承陽の神主で、青雲亭には神主が発見されないといっておいたもの。それには蓋と推定される部分に、

皇清 誥贈特授甲国甲必丹大諱 承陽陳府君神主

男振^{徳世}孫明珠奉祀

とある。甲国とはいうまでもなく馬六甲 Malacca のこと、甲必丹大とは甲必丹 Kapitan にこれと同義のマラヤ語 toa または tua を音訳した大の字を添えたものである。内には、

* 京都大学人文科学研究所

生于康熙癸未年九月廿五日午時

公諱 承陽行五享壽八十有二

卒於乾隆甲辰年六月廿二日丑時

下部に葬三寶井山頂坐亥向巳兼壬丙辛巳辛亥分金とある。

これによって、不明だった陳承陽の生年は康熙42年（1703年）ということがわかり、卒年は乾隆49年（1784年）で、明記されているごとく82歳という年齢にちょうど合うのである。下部に記された葬所の位置こそ、今日も **Bukit China** のほぼ山頂に南面している墓地にあたるのであろう。しかし、墓石には前に詳しくのべたように乾隆四十四年端月吉旦，男 ^{次房振德}_{三房振世} 長房孫明珠等全立石とあって、年次が神主と一致しない。まさに5年の差がみられるのであるが、もしこの神主が誤りないとすれば（享年八十有二とまで明記されているのだから），墓はその死に生立ってあらかじめ立てておかれたということになる。前の論文で陳承陽のあとをついでカピタンとなったのは陳起厚であろうと推定し、その論拠として乾隆丙午（1786年）の年記のある額に知六甲政事陳起厚立とあるのをあげた。そのとき墓石によって陳承陽の死んだのが乾隆44年（1779年）だとすれば、1786年まで7年間あることを指摘したが、神主によると死んだのは1784年となり、その差はわずか2年と縮まるわけである。陳起厚が陳承陽のあとをうけて、すぐカピタンになったのではないかという推定は、いっそう確実になったと考えてよい。

II

第二は前にはその存在すら想像できなかった一人のカピタンの神主である。蓋と思われる部分には、

顯考諱 敬信特授甲必丹大曾先生之神主

成
孝男安然等
定

とあり、内には

生于乾隆三十六年辛卯年七月十八日戌時

公諱 專一行四享壽五十有二

卒于道光二年壬午十一月初九日丑時

とある。乾隆36年は1771年，道光2年は1822年。下部には風水説による墓の位置は示されていない。

前の論文で、嘉慶7年（1802年）に死んだ蔡士章のあとをついだカピタンとして、9番目に曾有亮をあげた。その証拠としたのは、宝山亭にある嘉慶甲子（1804年），嘉慶己巳（1809年），青雲亭にある嘉慶14年（1809年）の三つの額である。曾有亮は生死の年が全くわからないので、かれがはたしていつまでカピタンの任にあったか不明であるが、1824年ごろは別の人がカ

ピタンであったろうということを想定しておいた。ところがこの新資料によると、曾有亮は1824年よりもずっと前に死んでおり（おそらく生前にカピタンの任を退いたのではあるまい）、代わって曾専一というものがあとをついでいたことがわかるのである。

葉華芬師 (Rev. Yeh Hua Fen) が “*The Chinese of Malacca*” の中で、マラッカの最後のカピタンとしてイギリスによる一時的な占領期間を通じて、その任にあったのはおそらく **Chan Olim** というものであったろうとのべていることは、すでに紹介した。葉師は曾有亮のつぎのカピタンが **Chan Olim** だとは必ずしもいっていないが、そのように受けとられないふしがないでもない。しかし最後のカピタンとしては、青雲亭にある額によっていま一人のカピタン曾世芳というものが考えられるのではないかと提案しておいたのである。ところが今回、新資料によって曾有亮と曾世芳との間に、曾専一というカピタンの存在していたことが明らかとなった。いったい、この人がいつカピタンになったか明らかでないが、第2回のイギリス占領中（1807～1818年）のことだったであろうか。この三人の曾カピタンの血縁関係のごときは、今日のところまだ明らかにすべき資料は何もない。ともかく、曾専一はイギリス占領中の難局に処したのち、1824年イギリスのマラッカ支配が確定する以前に死んだのである。

そのあとをうけてカピタンになったのが曾世芳だとすれば、この人こそ最後のカピタン **Chan Olim** にあたるのであろうか。張清江は C. S. Wong (黄存燊) の *A Gallery of Chinese Kapitans* の漢訳本『華人甲必丹』において、**Chan Olim** を曾烏霖という漢字にあてているが、これが全くあてにならぬことは、前にも他の例をあげて指摘した通りである。もし曾 (Chan) 世芳の通称が **Olim** といったとでもいうことが判明しない限り、**Chan Olim** に比定すべき人は見つからない。新資料の発見を切に望むものである。